

問われる「靈峰」との距離

山頂は雲に隠れ、赤茶けた山肌の崩壊が続く「大沢崩れ」の長大な谷は、えぐられたような痕を見せる――

冠髯した姿を模線との全体像で捉える美の系譜から外れた富士を1960年代に撮った反骨の写真家がいる。鋭い記録性の作品で知られた濱谷浩（1915～99）だ。

明治以降、富士山を國威發揚に用いる試みは写真表現に顕著だった。和光大の小関和弘教授（日本文化論）が「政治利用の頂点」と指摘するのが昭和2600年（1940年）に発行された岡田紅陽（1895～1972）の「富士山」。1000円札の富士山の図柄になった「湖畔の春」を代表

戦後、平和の象徴へ



濱谷浩 脱神格化への試み

作とする岡田は序文で「八紘一宇（世界を一つに和合させる意。軍事進出正当化のスローガンとして用いられた）の盛國の大理念をシンボライズする雄偉富士山をいま燃え立つ心で、嚴肅の態度でもう一度見直したい」と熱狂的に語った。濱谷も太平洋戦争中は國策宣伝など岡田らと同様、戦時プロパガンダを担った。だが戦後、戦争責任の認識と自己批判の姿勢が独自の視線を与えていく。

時代は政府と国民の激しい対立が60年安保闘争で下火となり、高度経済成長への道をまい進する。だが、「熱しやすく冷めやすい」と濱谷の目に映った。60年に日本人を生む風土を見極めるため、写真集「日本列島」の撮影を開始。終章のために撮られたのが、異端の富士だった。

人の視線は敗戦を境に変わったとする意見もある。「日本が戦争に進む中で富士山は『敬用』された」。90年代に米紙日本特派員だったオレゴン州のルイス・アンド・クラーク大准教授、アンドリュー・バーンスタインさんはこう表現する。戦後、連合国軍総司令部も軍国主義と結びついた「自然に情緒を託すこと、富士山の映像を敬しくチェックされることも好まず、征服

ツクしたが、アンドリューさんは「平和を志向するようになった日本人は、（戦後も変わらぬ）富士の姿に『日本は存続する』と自信を持ち、平和の象徴とみなすようになった」と指摘する。

濱谷は「日本列島」で自分の視点を披瀝している。「自然に情緒を託すこと、富士山の映像を敬しくチェックされることも好まず、征服できるものだとも思わない」と。「靈峰富士を撮るつもりはない」とも語った姿勢は、漱石が自然そのものとして理解した富士観に通じる。

世界文化遺産の登録で、「靈峰」の気高さや偉大さを強調する言説が目立ったとして、小関教授は「賛美一辺倒でも無関心でもなく、濱谷さんのように富士山と上手に距離を取る態度が必要だ」と話す。

仰ぎ見るその姿が現実と乖離していないか、日本人の視座が問われている。（連載は西嶋正信が担当しました）